



木材の出荷作業をする学生

村の木材で経済を 活性化するには？

大学生体験
学業体
八林業

新郷

新郷村西越の山林で16日、八戸学院大地域経営学部の学生が林業を体験する授業が行われた。学生は林業の作業を通じ、間伐材を村内で使用可能な地域通貨に換金する「木の駅プロジェクト」の内容を実体験し、村の木材で地域経済を活性化させる仕組みを学んだ。

「木の駅プロジェクト実行委員会」(漆戸徹委員長)などが協力した。プロジェクトは、山林所有者らが間伐材を村の「木の駅」に出荷すると、量に応じて地域通貨「郷やま券」を受け取れる仕組み。間伐材は三八地方森林組合が買い取り、まさに加工して新郷温泉館の木質ボイラーで使用される。

授業の前半では間伐や枝打ちを行った。後半では伐採した木材を、木の駅がある同組合新郷事業所へ出荷。寸法を測定し、換金した値段を試算した。学生は精力的に取り組み、プロジェクトの仕組みを理解していた。また、キノコの自然栽培と林業の関係についても学んだ。

野村実紀さんは「林業は力仕事という印象だったが、機械化が進んで省力化が進んでいることが分かった。キノコ栽培も面白かった」と語った。

(田村純也)

同学部の科目「地域経済学特殊講義」の一部として行われ、3年生19人が参加。